

日本体育学会
体育哲学専門分科会
会報
Vol.13 (1), April, 2009

- 記事
- ♪巻頭言
 - ♪会長挨拶
 - ♪運営委員長挨拶
 - ♪体育哲学考
 - ♪書籍紹介
 - ♪私の研究
 - ♪定例研究会のご案内
 - ♪箱根合宿のご案内
 - ♪運営委員会からのお知らせ

巻頭言

理論的知識の体験的知識化—知識の理論的統合と知識の実験的学習—

石川 旦（前仙台大学教授・東京大学名誉教授）

一般に人は、日常的に「意味（価値）がある」あるいは「意味（価値）がない」というとき、何を基準にしてそのように判断するのであろうか。近年の価値観が多様な社会においては、現実に生起する物事には誰にでも共通に受け容れられる、絶対的に「意味（価値）がある」といえるものは無いのであろうか。また、自分にとって本当に真実として確信できる「正しい知識（情報）」とは、一体どんな知識（情報）であらうか。K. ポパーは、「全ての知識は理論である。それは反駁可能な形式で提示されるべきである。」と述べていたように思う。信頼できる多くの知識（情報）は、多くの実験的・技術的实践および論理的思索・検討を通して蓄積され伝達されてきたもので、現在の時点において多くの人々によって確かであると信じられているものであると思われる。

学術的・教育的な一専門領域としてのわれわれの社会的役割は、「身体運動の科学と教育の実践」に関して哲学的に考察し、その科学的知識（情報）の妥当性とそれに基づく教育実践を意味（価値）あるものにするのでありと私は考えた。このような学術研究と教育の実践における社会的な営為の中で、これまでに私が重要な視点であると考えてきたことは、表題に示すような「理論的知識の体験的知識化」（身体運動科学の知見の統合と教育効果の達成）であった。わたくしは、個々の人々が適切な科学的理論的知識（身体運動科学の知見）を自らの身体活動を通して、実験的・体験的に学習することによって、自らがこれらの知識（情報）を W. B. キヤノンが言うような「身体の知恵」（真の意味での体得）にすることが、本当の身体教育（体育）のあり方であると考えた。

体育哲学の領域において、人間の身体活動に関してその本質論的な論議を展開することはもちろん重要であるが、教育の実践の場において、それまでに見出された科学的な（客観的）知識及び哲学的・概念的な知識を、教育の場において学習者個人にいかにも実践的に体験的知識に移し換えるか、その方途を検討することも重要であると考えた。

「意味（価値）」は、各個人の「生き方」（生きる目的）に応じて評価（判断）され、それぞれ「個別な意味（価値）」において各個人に把握されると私は考える。しかし、個人は、自然的な一身体である「ヒト」、「ひと」および「人」として独自でありながら、しかも共通の「生物学的諸特性」をもち、また歴史的・社会的・文化的な「人間」あるいは「人類」の一員として独自でありながら、また共通の文化的諸特性を持って「生きて」いる。このことから、「身体活動に関する科学的知識および教育の実践」は、各個人において「独自の体験的意味（価値）」をもちながら、また他の人々とも「共通な体験的意味」をもちうるものと私は考える。

このような考え方は、今日の社会において「生活習慣病」が流行的な状況にあり、そのために日常的なスポーツや身体活動の適切な実践を含む「活動的な生活様式」の確立が緊要な状況において、現実の社会の必要性に適合した一つの主張のように私には思われる。

会長からのご挨拶

「変化」の時の中で 大橋道雄（東京学芸大学）

新緑のキャンパスに不安と期待に胸躍らせた新入生が、これまた当時は心許なげであったにも関わらず下級生が入ってくるということで急に落ち着いた様子を見せる（装う？）上級生に紛れて、初々しい顔を輝かせる4月のこの時期は、私たちにとっても特別の時のように思われます。新入生の諸君はこれからの4年間を見据え、あるいはこれまでの高校生活を飛躍の足がかりとして大学生活に様々な目標を持ち新しい生活に向かおうとします。先輩諸君は、これまでの生活を振り返りあるいは反省し、新しい力に刺激されながら残りの学生生活への目標の再構築を試みます。

正月然り、誕生日然り、何らかの記念日然り、漫然と流れる時間の中で、我々はふと立ち止まりこれまでを振り返り、現実の自分を見つめ直し、これからの有り様を考える機会を作り出すことを行ってきました。この所作は悠久の時空の流れの中で時として怠惰に流れがちな己を戒めこれからの方向を見つけ出すための方策として生み出された叡智だと思えます。

学校教育においては10年おきに改定が繰り返され、本年度から新しい指導要領の基に教育が実践されようとしています。これまでの所謂「ゆとり教育」が見直され教授内容の充実叫ばれています。体育の分野に於いても「運動本質論」に基づいた教育実践が30年近く行われてきていますが、その内容を変えつつあるといえましょう。しかし、ここで考えられなければならないことは、「変化」させるということは常に過去を反省総括しそれを前提とし将来への展望を示すということが不可欠なのですが、この過程がややもすると不明確のままことが進められているように思われる点です。

阿部忍は曰います、「変化に対応しながら絶えず疑問を発しながら追及しなければならない」と。哲学の役割云々を述べるのは会員の皆様に対して釈迦に説法であると考えます。しかし、「変化の時代」であればあるほど、我々の果たすべき役割は重要になるのではないかと考えます。体育哲学専門分科会がこの時代の中で益々力を発揮するために、会員諸兄のご努力とご協力を願ってやみません。

運営委員長からのご挨拶

服部豊示（明治薬科大学）

平成21年度より本分科会の運営委員長を拝命することになりました。もし本分科会が独立学会であったとすれば、運営委員長という役職は理事長に相当します。たいへん責任の重い役職だと思えます。はたして私に運営委員長が務まるのか、たいへん不安です。

不安だけですが、有り難いことに体育哲学専門分科会は他の専門分科会の会員からうらやましがられるほど、分科会内部の人間関係がたいへん良好な状態にあると思えます。会員数が正味200名を割っているという危機的な状況がありますが、本分科会存亡の危機をみんなの力で乗り越えていこうという雰囲気があります。出身大学による派閥というような嫌らしさとは無縁の組織です。

ところで、私は「上手くいったことはもう一度繰り返し、上手くいっていることは続けよう。そして、上手くいかなかったときは何かを変えてやってみよう」、という生活信条にもとづいて行動しています。スポーツでたとえれば、試合の流れがチームの思惑どおりに展開しているときは今のペースを保ち、戦術は変えない、というようなものです。本分科会の運営は、先ほども述べたとおり上手くいっていると思えます。それゆえ、私は前運営委員長であった久保正秋氏（東海大学）の運営方法を踏襲していきたいと考えています。また、久保正秋先生は前事務局の深澤浩洋先生（電気通信大学）に大いに支えられつつ職務を遂行していました。私も久保先生にならって、新事務局の新保淳先生（静岡大学）を頼りにしています。新保先生、どうぞよろしく願いいたします。

また、運営委員会にはいくつかの分野があり、それぞれ有能な先生方が運営を担ってくれています。運営委員の先生は、みなさん頼りがいのある先生方ばかりです。これからも本分科会の発展のためにご尽力を賜りますようどうぞよろしく願いいたします。

最後になりましたが、運営委員会は会員のみさんの学会活動が円滑に進められるようサポートしていくための組織であると考えております。主役は一般会員の皆さんです。会員の皆様のご要望によりよく応えられるような組織でありたいと思っております。是非とも、運営委員会にご要望やご提案等をお寄せいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

体育哲学考

体育哲学の未来に向けて— そのための一石になることを祈って —

小林日出至郎（新潟大学）

休み時間に体育館を児童が動き回る。熟年世代は熊やカモシカに代わって野山を歩いている。課外活動で大学生は若さいっぱいの汗を流している。何故、人間は運動するのか。この問いへの回答は様々である。運動自体の喜び、運動後の爽快感、人間関係の親密化、未知の世界体験、自然への回帰、勝利の獲得、記録の更新、新たな自己の創造、自己実現、健康等、これら以外にも、理由はいくつも予想できる。運動者の多くが、自分の行動や体験を分析し、知的に自覚しつつ、身体運動を実践しているわけではない。からだを動かすことが楽しい、それ以外の理由を明らかにして、何になると主張する方も多い。1987年から推進されたわが国の政策的健康スポーツ活動は余暇時間の楽しい思い出を多く残している。しかし、1990年以降のバブル崩壊後、余暇時間における楽しいスポーツ活動が、金融界の混乱、自然破壊、社会道徳の荒廃等、深刻な社会問題の要因であったことを忘れてはならない。この背景には「錬金術」があり、スポーツ文化が利用された可能性が高い。このような理解には人間の論理的思考が必要である。

当時、そのような知性を働かし、人々に警告を發した団体や Mass Media は多かった。これらの組織的知性は、地域における自然の保全や住民の健全な関係に貢献している。しかし、「錬金術」に囚われた人々は、衣食住の楽しみや自己の快楽を実現にすると信じているお金への執着心を煽り、庶民を操り、当時の多くの日本人を闇の世界へと誘導していた。西洋文明の古典期に生きたソクラテスは、当時のアテネ市民に向かって警告している。お金・権力・名誉に関して優位な立場にあった当時の市民に、真理の探究を、人間を超える存在の重要性を彼は命懸けで訴えている。「・・・世にもすぐれた人よ、君はアテナイという、知力においても、武力においても、最も評判の高い、偉大なポリス（市民国家）の一員でありながら、ただ金銭を、できるだけ多く自分のものにしたいというようなことに気がつかっていて、恥ずかしくはないのか。評判や地位のことは気にしても、思慮と真実には気がつかわず、たましい（いのちそのもの）を、できるだけすぐれたよいものにするように、心を用いることもしないというのは、・・・」（田中美知太郎訳『ソクラテスの弁明』D29；『プラトン全集1』岩波）

私たちはソクラテスの言葉に耳を傾け、日々の生活に彼の言葉を生かし、自己の活動に活かすことができれば、お金の囚人ではなく、その活用者となり、本当に多くの幸いを授かることになるであろう。このような示唆は、上田閑照・柳田聖山著『十牛図』（ちくま学芸文庫）や永井隆著『花咲く丘』（サンパウロ；旧社名：中央出版社）においても学ぶことが可能である。心を込めて学び、日々の活動や研究に活かしたいものである。

書籍紹介

関根正美（岡山大学）

J. Court, E. Meinberg (Hrsg.) *Klassiker und Wegbereiter der Sportwissenschaft*

Kohlhammer, 2006.

私が少年時代のころ、梶原一騎原作の『プロレススーパースター列伝』という漫画を夢中になって読んだことがあった。『スポーツ科学の古典作家と開拓者たち』と題した本書は、さしずめ「(ドイツの) スポーツ科学スーパースター列伝」の趣を呈している。本書には全部で50人にのぼる開拓者たちが紹介されている。その中にはたとえば、F. ニーチェ、K. コッホ、C. ディーム、E. カッシーラー、E. シュプラングー、H. プレスナー、J. オルテガ・イ・ガセー、J. ホイジンガ、L. ヴイトゲンシュタイン、O. グルーペ、H. レンク、K. マイネル、M. メルロ＝ポンティ、M. フーコーなどといった、わが分科会でもなじみの人物が「スポーツ科学の古典ないし開拓者として」記述されている。その他では自然体育で有名な K. ガウルホーファーと M. シュトライヒャーの名前もあるし、心理学者、スポーツ医学者も名を連ねている。ドイツ以外の人も取り上げられているが、それはドイツスポーツ科学への貢献という観点で選ばれている。

本書で採用されている時代区分は次の通りである。

1. ドイツ帝国成立から第一次世界大戦終結まで (1871-1981)
2. ワイマール時代 (1918-1933)
3. 国家社会主義の時代 (1933-1945)
4. 1945 年以降 (1945-1979)

編者らはグルーペやホルマン、レンク、マイネルなど60-70年代に活躍した人までを「古典」に組み入れている。その理由を編者らは「彼らはその作品を通じて新たな認識とスポーツ科学の方向性を示したから」であるとしている。また、オルテガや K. O. アーペルなど一見関係がなさそうに見える人物については、「スポーツ科学に対して継続的に影響を及ぼし続けている」との理由で採用している。各人物の章は、伝記、主要著作の概要、これまで及ぼしてきた影響、評価から構成されている。なかでも、影響と評価の部分が興味深い。たとえばアーペルに関しては、彼の倫理学がマインベルク (2004) とパブレンカ (2004) のドーピング議論と関係しているなどということも書かれており、それらを読むとスポーツ哲学者たちの議論における相関関係も浮き彫りになってくる。

私はこの本をすべて読み終えているわけではない。実を言うと時々ぱらぱらと拾い読みしている程度であるので、あまり偉そうなことはいえない。今のところ、これが論文のネタになる気配もない。ただ、雑務の間に本書を拾い読みしている時間は、自分が研究者の端くれであることを思い出させてくれる時間になっている。

本稿を書き終えて本屋を徘徊していたら新刊コーナーで『文化系必修研究生活術』(東郷雄二著、ちくま学芸文庫)をみつけた。ついでにこれも紹介しておこう。人文系学問研究の方法・手順を紹介した本書は特に若手研究者や研究者を目指す人に有益であると思われる。本書を読んで、数年前に買ったものの持ち腐れになっている文献管理ソフトを遅ればせながらインストールする気になった。

私の研究

林 洋輔 (筑波大学大学院)

早いもので、私が「体育哲学」に入門してから四年目の春を迎えました。幸いにも指導教員はじめ多様な学習機会を頂戴する中で、現在まで充実した学究生活を過ごしております。この度、光栄にも本欄を執筆する機会を賜りました。つきましてはここに謹んで現在の関心、ならびに学修状況をご報告申し上げます。

私の現在の関心を研究対象、そして方法の順に申し上げれば、以下のようなと思われる。すなわち対象としては「身体教育における(被教育者の)心身のメカニズム」探求、方法としてはデカルト(Rene Descartes 1596-1650)の思想研究であります。

ご存知のように体育哲学において、体育とは「ヒトの身体面からの人間化」であることが明らかにされております。この前提を受け、人間の身体が形成されるに際して思惟作用がいかなる役割を果たすのか。これについては未解明の課題として斯学で議論の余地があるように思われます。ここですぐに察せられるように、私の研究は分野で言えば、いわゆる「心身論」に属します。そして当分野は往

時から数多の議論が行われたこともまた、周知の事実です。ただし過去に「身体の実体化」や「心身一如・一元」の混同からも了解されるごとく、未だ確固たる基盤に立っての展開がなされていないようにも思われます。他方、教育の核心が「ヒトの人間化」であり、かつ当の人間に思考活動を認めるならば、「身体形成」たる体育においても心的領域に対し、何らかの立場ないし態度をとる必要があるのではないのでしょうか。つまり簡略にまとめますと、現実の経験世界に生きる我々が心身の統合体として意識される以上、体育哲学の課題として「身体教育における心身相関の原理的検討」が研究対象として浮上するのではないかと考えております。

他方、私の研究を意義付ける要素としてデカルト哲学、特に心身問題を軸とした文献研究が挙げられます。これまでデカルトは再考の指摘こそ挙がるものの、概して否定的評価のまま研究史が蓄積されたように思われます。その理由としてはやはり通称言われるところの「心身分離」、つまり「心身の実在的区別」がその論拠となるのではないのでしょうか。しかし私はデカルトの勉強を重ねるにつれ、体育哲学ではデカルトが「否定」対象から「肯定」のそれへと大きな転換を遂げる可能性がある、と考えるに至りました。その帰結として体育哲学におけるデカルト受容の大幅な見直しを行い、そこにおける新たな解釈の提示を一つの到達点に据えております。

デカルトは体系的な哲学者であり、テキストも複数の言語が使用されるなど限られた院生時代には余りにも巨大な課題と申し上げることができます。しかし生涯にわたり追求できる哲学者を研究方法として向き合える現状に感謝し、今後も謙虚に歩を進めたいと考えております。将来における研究発表に際しては、諸先生方からご指導を頂きますよう心からお願い申し上げ、以上をもって私の研究紹介とさせていただきます。

定例研究会のお知らせ

新保 淳（静岡大学）

本年度第一回目の定例研究会等について、下記の通りお知らせ申し上げます。

開催日：平成21年5月16日(土)

場 所：順天堂大学本郷キャンパス10号館3階303号室

発表者：千葉洋平(国土館大学) 発表題目：スポーツ普及のための基礎思想の研究

王 一民(首都大学東京) 発表題目：2008年北京オリンピック競技大会における「同心結」交流プログラムに関する研究

片渕美穂子(和歌山大学) 発表題目：17世紀養生論における身体の相似性－沢庵『医説』及び『骨董録』を中心に－

13時30分より 運営委員会

15時00分より 定例研究会

18時00分より 懇親会(福よせ：JR御茶ノ水駅 徒歩1分、電話番号：03-3295-4172)

夏期合宿研究会 in HAKONE

深澤浩洋（電気通信大学）

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。

今回も土日・祝日を日程に組みました。また、昨年実施しましたラウンドテーブルについて、企画内容を募集します。奮ってご参加下さい。

期日：2009年7月18日(土)、19日(日)、20日(月、祝日)

場所：静雲荘(住所)〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1320(電話)0460-82-3591

♪小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車／改札口を出て右手地下道をくぐり直進／道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

☆日程表（申込みの状況によって、多少変更になることがあります）

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
18日（土）						受付		研究会①					夕食（運営委員会）	
19日（日）	朝食	研究会②		昼食	研究会③								懇親会	
20日（月）	朝食	研究会④	事務協議	解散										

☆特別企画：ラウンドテーブル 2009

分科会が論ずべきテーマ、体育界の内外に対し問いかけたい問題について、世代の壁を越えて熱く議論を交わす場、それがラウンドテーブル 2009 です。学会大会のシンポジウム・論文集等の企画を温めるインキュベーターの役割も期待されます。今年度は、あらかじめテーマ案とモデレーター（世話人）を募り、当日、参加者の関心に基づいてグループ編成する形式を考えております。議論してみたいテーマをお考えの方は、深澤 fukasawa@hc.uec.ac.jp までご連絡ください。

☆費用：22,000 円（予定、去年と同額）

- ・研究会参加費：3,000 円
- ・宿泊費等：19,000 円（全日程参加の場合／2泊朝夕食、懇親会費を含む）
- ・シングルでの宿泊も申し受けます（先着3名まで、追加料金：1泊2,000円）
- ・学生、院生、研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆同封のハガキに必要な事項を記入の上、6月15日（月）必着にてお申込み下さい。

もしくは、Eメールにて申し込まれる方は、お名前、ご所属、連絡先、発表演題、宿泊のご予定（食事の有無を含む）を明記し、深澤委員 fukasawa@hc.uec.ac.jp までお申し込みください。

- ・部分参加の場合は、宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。
- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7月10日（金）以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。

☆詳しい「プログラム」は、7月3日頃に郵送する予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員：深澤浩洋

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘1-5-1 電気通信大学

E-mail：fukasawa@hc.uec.ac.jp Tel：042-443-5584（研究室直通） Fax：042-443-5590

お問い合わせは、なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。

運営委員会からのお知らせ

事務局：新保 淳（静岡大学）

○平成 21 年度の活動計画

5月	上旬	会報第13巻第1号発行
	16日（土）	第1回定例研究会
6月	15日（月）	夏期合宿研究会申し込み締め切り
7月	上旬	夏期合宿研究会プログラム発送
	14日（土）～16日（月）	夏期合宿研究会・運営委員会（定例）
8月	中旬	「会報」第13巻第2号発行
8月	26日（水）～28（金）	日本体育学会第60回大会・運営委員会（定例）・総会
11月	中旬	「会報」第13巻第3号発行
12月	上旬（土）	第2回定例研究会
2月	中旬	「会報」第13巻第4号発行
3月	上旬	第3回定例研究会
3月	31日	「体育哲学研究」第40号発行

○体育哲学専門分科会新体制 2009—2010

平成21／22年度期 体育哲学専門分科会役員・組織が決定しました。昨年度の体育哲学専門分科会運営委員選挙で選出された運営委員（定員12名＋会長推薦6名）を中心に、以下の体制で運営することになります。

会長 大槁道雄（東京学芸大学）

副会長 久保正秋（東海大学）

監事 河野清司（中京女子大学）、田中 愛（武蔵大学）

幹事 高根信吾（富士常葉大学）

★運営委員会（◎印は各担当の主任を示します）

運営委員長 服部豊示（明治薬科大学）

同代行 舛本直文（首都大学東京）

庶務・会計担当 ◎新保淳（静岡大学）、石垣健二（新潟大学）

研究担当 ◎舛本直文（首都大学東京）、近藤良享（筑波大学）、小林日出至郎（新潟大学）、林 英彰（京都教育大学）、深澤浩洋（電気通信大学）

大会企画担当 ◎関根正美（岡山大学）、畑孝之（長崎大学）

広報担当 ◎阿部悟郎（仙台大学）、釜崎太（立正大学）、加藤敏弘（茨城大学）、松本真（埼玉大学）

編集担当 井上誠治（国士舘大学）、佐藤臣彦（筑波大学）、滝沢文雄（千葉大学）

★常設委員会

☆編集委員会

委員：井上誠治（国士舘大学）、関根正美（岡山大学）、深澤浩洋（電気通信大学）、杉山英人（千葉大学）、釜崎太（立正大学）

☆学会大会企画運営委員会

委員長：関根正美（岡山大学）

委員：畑孝之（長崎大学）、

同専門委員：企画A 大槁道雄（東京学芸大学） [阿部悟郎（仙台大学）]

企画B 樋口聡（広島大学）

企画C 新保淳（静岡大学）

☆選挙管理委員会

委員長：小林日出至郎（新潟大学）

委員：石垣健二（新潟大学）

☆規則・規定等整備検討専門委員会

委員長：畑孝幸（長崎大学）

委員：阿部悟郎（仙台大学）、高根信吾（富士常葉大学）、深澤浩洋（電気通信大学）

★事務局 静岡大学（新保淳） E-mail:ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学教育学部 Tel (Fax) 054-238-4671

★編集事務局 未定

○「日本体育学会第60回記念大会（広島大学）一般発表について」

日程：2009年8月26日（水）～28日（金）

会場：広島大学総合科学部

大会ホームページ <http://www.ntg60.jp/index.html>

発表申し込み締め切り：平成21年5月8日（金）（奮ってご発表の申し込みをお願いいたします）

発表申込方法

①一般発表申し込み

大会ホームページ【一般発表申込み・大会予稿集入稿】から申し込んでください。

②大会予稿集原稿

予稿集原稿の作成にあたっては、作成要領をよく読んで間違いのないようにしてください。

予稿集原稿は、大会参加の申し込みを行った後で、大会ホームページから入稿してください。

なお、本年度の体育哲学専門分科会の大会企画は、下記の通りです。

・シンポジウム1（企画A：シンポジウムA）

開催日時：8月26日（水）10：10－12：10

シンポジウム名：体育哲学における学校体育論議の検討とその視界（1）

学校体育論の逆照射—体育は子どもたちをどうしたかったのか？—

・シンポジウム2（企画B：シンポジウムB）

開催日時：8月27日（木）9：00－11：00

シンポジウム名：＜広島＞と身体文化：ローカリティの哲学の試み

・キーノートレクチャー1

開催日時：8月26日（水）9：00－10：00

キーノートレクチャー名：教育学とスポーツ哲学（David Turner氏）

○「分科会メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方は現在のところ57名です（2009年4月12日現在）。これらの方々へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。
- 3) [taiikutetsugaku@yahoogroups.jp]グループについてのお問い合わせ
グループ管理者（事務局）：taiikutetsugaku-owner@yahoogroups.jp

【ご挨拶】

最後になりましたが、今年度から「しばらく」の間、事務局を担当することになりました、新保です。4月からは大橋道雄会長以下、新しい構成で運営委員会がスタートいたします。これからも引き続き会員の皆様から本分科会の運営にご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます（新保淳）。

体育哲学専門分科会報第13巻第1号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄（会長）

編集者 阿部悟郎（広報委員長）

発行日 平成21年4月26日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南

2-2-18 仙台大学体育学部

0224-55-1147（直通）

アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

新体制になって初めての会報です。四月に担当を拝命し、前任 M 先生の偉大さを感じながら右往左往するなか、敏腕編集者 K 崎先生の獅子奮迅の働きによって、なんとかお届けすることができました。何よりも執筆依頼にご快諾下さった諸先生方に深謝。会報の編集・発行にあたっては、ただただひとえに会員の皆様のご協力だけが頼りです。この先もご指導・ご協力をよろしくお願いいたします。（A 拝）